

ワシントン州のワイナリーでの雑感

サッポロワイン（株）勝沼ワイナリー
伊藤和秀

アメリカ北部西海岸に位置するワシントン州は、リースリング・シャルドネ・カベルネソーヴィニオン・メルローなどの醸造用品種を約4000ha栽培し、2～3万KLのワインを生産するアメリカ有数のワイン産地です。今回、同州のヤキマバレーにあるワイナリーにおいて仕込みのお手伝いをする機会があり、そこで作業する中で感じました社会組織に対する印象について述べたいと思います。

このワイナリーは、仕込み能力でワシントン州2番目の規模を有し、仕込み期の約2ヶ月間で約1万トンの仕込みを行います。このため最盛期の約1ヶ月間は完全24時間体制となり、各作業部門とも2～3交替制となります。この体制の中で、収穫・仕込み・醸造の各マネージャーはもとより、メキシカン移民を中心とした現場労働者に至るまで、日本と同様に一生懸命働いています。しかし、この作業を行う中で、日本と違う点があることを痛感しました。一つは、個人（多民族・多人種社会における個人、また、会社人としてではなく家庭人としての個人）の尊重であり、もう一つは個人尊重の会社風土における会社としての管理体制（組織化・分業化）の在り方です。

このワイナリーにおいても、日常作業の管理・指示は日本と同様ですが、その際のやり取りの中に日本のように単一民族では感じなかったお互いの尊重心（民族・人種の違いに対する警戒心？）を感じ、多民族社会の難しさ、社会の違いが感じました。このことは単一民族社会の日本がよいというのではなく、逆にお互いを尊重し合う気持を意識的に持つことの必要性・重要性を再認識させられるよい機会になったと思います。また、最近よく話題となる生涯教育や、諸外国からの日本の高い就業時間に対する批判などは、基本的には会社人としての個人という日本の体制に対する問題提起ではないかと感じるようになりました。会社人としての個人は、今日までの日本（社会・会社）を支えてきた原動力であることは間違いなく考えますが、今後の社会変化を踏まえ会社としては、それに対応できる組織作りが重要と思いました。

この国においては、転職は一般的であり、同一会社に長年勤めることも少なく、また日本のように社員教育として個人を会社人（社会人）として教育・育成するシステムもほとんど無いようです。この点は、このワイナリーにおいても同様でした。日本の会社は、管理・作業組織としての組織化・分業化が進んでいると考えていましたが、ここでの組織化・分業化は当社と比べより明確な管理・作業系統に基づく分業化が行われていました。こ

のことは会社における個人の立場を会社組織の構成員（会社人）としてよりも、個人個人を一つの組織単位として位置づけ、個人の自由度に幅を持たせる結果となり、これにより前述の社会環境の中でも、会社が組織として成り立っている一つの理由になっているのではないかと考えました。

今後の日本社会は、より個人重視・個人尊重の社会になっていくことが予想されます。今回、ワシントン州のワイナリーでの仕事を通して、会社のあり方についても、考えを深められたように思いました。

